

道路の物質文化論-新潟県津南町見玉のホンドウリを事例として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斗鬼, 正一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7730

道路の物質文化論

——新潟県津南町見玉のホンドウリを事例として——

THE STUDY OF MATERIAL CULTURE ON ROADS

——THROUGH THE FIELD STUDY ON 'HONDORI' IN
MIDAMA, TSUNAN-MACHI, NIIGATA PREFECTURE——

博士後期課程 政治学専攻3年

斗 鬼 正 一

MASAKAZU TOKI

はじめに

本稿は、新潟県中魚沼郡津南町^{ミダマ}見玉の、ホンドウリと呼ばれる特殊な道路を事例として、道路を物質文化論の立場から検討する事を目的とする。

道路は言うまでも無く空間的移動の為の道具、つまり或る方向への物理的距離を解消する為の道具である。旅と交通の民俗、歴史地理学、工学等からの検討がこの立場から行なわれる。しかし物質文化論に於ては、氾濫する道具が、逆に人類に対する脅威にさえなっている文明社会の状況をふまえて、即物的技術中心の物質文化論から、意味の世界の探求目差す物質文化論への転換が提唱されている¹⁾。即ち、道具を物的側面（ハードウェア）と、使い方、目的、そして意味性（ソフトウェア）とに区分し、後者に於ては、労働達成の為の作業的機能性だけでなく、意味的機能性をも検討するべきであるとするのである。本稿はこの立場から、道路が単なる物理的距離の解消の為以上のどんな道具として使用されているのかを、事例を通して、方向及び距離の扱われ方に注目しながら検討していく事とする。

ホンドウリは、見玉内部及び津南町一帯に広がり、ムラ内部ではヨメイリギョウレット、ノオクリ（野辺送り）、トリオイ、外部ではヨメイリギョウレットの場合に必ず使用しなければならない。この由来に就いてムラ人は、「昔からそうするもので、ホンドウリを通らないとヨメが戻るし、死人が冥途へ行かれない²⁾」と言うだけで、はっきりしない。現在ではヨメイリギョウレット、ノオクリは無くなり、ホンドウリも忘れられつつある。それ故本稿では、ヨメイリギョウレット廃止の端緒となったバス運行開始（1953年）以前に時点を設定する。

る。この他馬の通れないサクバミチ(作場道)、チカミチが各ムラ間に張り巡らされている。他方ムラ内の状況は、ムラの東側は段丘、西側はオキと呼ばれる田畑地帯で、その先を中津川が流れる。ムラの共同墓地は、シモと呼ばれムラザカイのあるムラ北端にある。反対の秋山寄りにはカミと呼ばれる。道路は巾1m程のものがムラ中に広がり、この他アゼミチが縦横に通じている。要するに道路は、馬の通れないものがあるとはいえ、段丘という地形にもかかわらず「網」と呼べる程度に四通しているのである。

2. フユミチ ムラの道路を考えるのに、無雪期の道路だけでは実は片手落ちである。ムラでは11月には初雪があり、少ない年でも2~3mは積もる。雪が消えるのは4月であり、1年の半分ナツミチは消失する。この間の道路がフユミチであり、春4月のユキワリまで使用される。この間交通のない道路は、埋もれたままである。近年大割野、見玉間のバス道路は融雪装置、ブルドーザーで確保されるようになったが、かつては隣のムラとの中間位まで踏んでいかねばならなかった。但しミチフミは上り坂では困難を伴う為、原則通りにはいかない。更に後述の様に、交通の必要性はカミ方向にはあまり無い為、トナリムラと相互に認めていない中深見、源内山間^{ゲンノウヤマ}の様な場合には、奥のムラが自力で踏まねばならない。いずれにしろ冬は、隣のムラとの間のフユミチを順々に辿る他なくなり、見玉、反里口間直行的チカミチや、反里口、船山新田間のチカミチであるデンシャドウリも使用出来なくなる。ムラ内では現在もミチフミが行なわれ、秋山街道に向けて次々と隣家へ接続する形はムラ間と同じである。従って、隣家と不仲の場合、街道から遠い方の家が単独で別のフユミチを踏まねばならない事がある。

3. ホンドウリの設定 以上の様な地理的状况の中で、ホンドウリがどの様に設定されているのかという、ホンドウリのハードウェアを次に検討する。まず秋山へは、秋山街道がホンドウリであるが、中津川兩岸にムラがある為、出来る限り街道を通り、枝分かれする様になる。見玉、太田新田間では、数多い道の内、ムラザカイから東に登る1本のみがホンドウリである。同様に反里口へは、直行する新、旧道、前述の太田新田経由の多数の道路等が考えられるが、この内太田新田へのホンドウリを経由していく一番遠回りである。反里口以北へのホンドウリも総てこれを経由し、秋成、中深見、船山、船山新田を次々に結んで大割野に至る。東西方向では、石坂へは秋成からの橋がホンドウリである。橋までは中深見からも行かれるが、中深見以北のムラからの場合一旦秋山街道に出て、秋成から向かう。下穴藤へは、昭和初期の橋改良以後見玉から直接向かうのがホンドウリとなった。しかしこの2ムラは目の前の対岸にあり、むしろ例外である。これ以外の東西のムラへは、総て一旦大割野まで出て東西に進み、再度南下する大変遠回りなコースがホンドウリとされる。源内山は勿論、下穴藤もかつては大割野回りであった。又先述のフユミチの殆どが、このホンドウリを踏むべきであるとされている事も付け加えなければならない。他方ホンドウリの設定範囲を見ると、秋山及び東西の沢までであり、大割野以北や信濃川北岸については、大割野の北の割野で川を渡るが、その先ははっきり決まっていない。東西の沢に遠も、善光寺街道を通る事は決まっているが、細目は決まっていない。且しこれらの地域と通婚がある場合は、先方のムラの老人の指示によるホンドウリを通る

事になるので、見玉の人々は、この地域に設定していない、という事である。ムラ内のホンドウリは、秋山街道を軸に枝状に広がる。この場合もムラ間と同様に、個別にはなく、隣家と次々に接続して秋山街道に合流する形で設定されている。

4. ホンドウリの設定原理 以上の事例からホンドウリ設定の原理を考えてみると、まず第1は1本道の原理である。見玉、太田新田間の例からは、あるムラからあるムラへのホンドウリは必ず1本だけである事がわかる。更に見玉、反里口間の例を見ると、太田新田経由、反里口直行の2コースを共にホンドウリにする事はせず、あくまで太田新田経由がホンドウリとされる。これは中深見、石坂間でも同様であった。道路は四通していても、必ずその内1本のみを選定し、東西方向にずれたムラを結んでいこうとするのである。しかし東西に離れすぎている場合、この原理には限度があり、この扱い方を示すのが、東西の段丘、沢のムラの例であった。これらのムラへはあくまで大割野に出てから南下する。少なくとも大割野より先で分岐させようという訳で、出来る限り分岐を防ぎ、1本道で結ぼうという設定である。ムラ内の場合も原理は同じである。曲がりくねって家々を結ぶ秋山街道がホンドウリとされ、分岐が不可避な場合にも、ムラ間の時同様、出来る限りひとまとめにした形である様になっている。

第2の原理は、ムラムラの順番を守る事である。新道が出来た場合を考えてみると、まず一番大掛かりなのは、ダム工事用軽便鉄道跡地を利用して作られたデンシャドウリである。反里口から分かれ、船山新田で再び合し、ムラムラを縫って走る旧道と対照的に、直線コースの整備された道路である。徒歩の場合15分は早い。しかしデンシャドウリはホンドウリにはならなかった。ところが、デンシャドウリ終点の少し先で分岐して大割野に向かう新道はホンドウリとなり、見玉から反里口に向かう現在のバス通りも、太田新田からの道路との合流点から反里口までは、ホンドウリに切り換えられた。又見玉から下穴藤へのホンドウリも、自動車道の完成と同時に切り換えられた。これらを比較してみると、デンシャドウリは途中のムラの地内を通過しているが、ムラヤの一軒も無い所を通過するのはムラを通過した事にならない。その上ムラザカイは、ホンドウリ上の、ムラの一番端の家の所であるから、ムラザカイも通過しない事になる。即ち途中のムラを飛ばしてしまい、ムラの順が狂ってしまうのである。他方ホンドウリに切り換えられた新道は、いずれもそれまで通りのムラ順でムラムラを通過するものばかりである。船山新田、大割野間、及び見玉、下穴藤間の新道の場合は、間に1つもムラがないから、何らムラの順序関係に変更を生じる事はない。また見玉、反里口間の新道を全線ホンドウリにしてしまうと、途中の太田新田を飛ばす事になるが、太田新田、反里口間だけならばその心配はない。又ムラ内では、新道は作られたがホンドウリが変更された事はなかった。

5. まとめ 以上を方向及び距離という点からまとめると、四通する道路の中から特定の1本道が選ばれる原理からは、特定の方向が選定され、ムラムラがその方向に物理的距離を隔てて1次元的に配置されるべきである、とされている事が指摘される。ムラ順を守る原理からは、ホンドウリは物理的距離を解消するよりも、ムラムラの順序関係を維持するべきであるとされている事が指摘される。

Ⅱ. ホンドウリのソフトウェア

1. 道路の使われ方 ホンドウリの使われ方を考える前に、まず道路のそれを考えねばならない。見玉の人々にとって道路は、反里口まで通わねばならなかった小学校高学年生以上の通学、娯楽から、伊勢参り、出稼ぎまで、あらゆる空間的移動の重要な唯一の道具であった。道路は又、外部の人々を招き入れる為にも重要な道具であり、^{ゴキ}替女等の旅芸人、行商人さえも人々は待ち望み、宿を提供した。中津川の発電所工事では日本中から労働者が集まり、見玉不動尊には参詣者が後を絶たなかった。そして又ヨメリギョウレットもやって来る。ムラを通過する人々も数多く、これらの人々の持って来る情報も又貴重であった。物資の移動の面では、盆、正月、儀礼時や、衣服、家具等の非日常的な買物にはどうしても大割野等に出て、しょって来なければならない。商品作物、例えば煙草の出荷も道路を利用して、十日町まで背負って行かねばならない。他方ムラ内の道路は、まず秋山街道の一部として使用され、更に当然ながら、生業、社交から葬送、ヨメリまで、総ての生活上の空間的移動に不可欠の道具であった。要するに道路は、人々にとって、人、物資、情報等あらゆる空間的移動に使用される重要な、必ず確保されねばならない道具であった訳である。

2. ホンドウリの使われ方 この様に物理的距離を解消する為の道具として、あらゆる場合に使用されてきた道路の中で、ではホンドウリはどんな使われ方をしてきたのだろうか。人々は通常、自由に、最も便利な道路を使用していたが、こうした中でホンドウリの使用が強制されるのは、ヨメリギョウレット、ノオクリ、トリオイの場合であった。道路を使用する多様なもののうち、特定のものが選定されている訳である。この事の検討は後に譲り、まず各事例を示す事にする。

<ヨメリギョウレット>バス開通以来すたれたが、かつてはヨメリギョウレットが行なわれた。当日はナコウド、ムコ方の本家の主人、父、オヂ、オバ等が、ニソイと呼ばれる嫁入道具を背負う人を連れて出向く。ヨメは玄関から出るが、たとえ隣家でも草鞋に脚半、縞の着物の裾をまくって笠をかぶる。即ち旅仕度で出る訳である。出がけには、葬式帰りの僧同様足を洗う。こうして夕方にはムラに到着し、ムラ中の人が見物する中を、玄関からムコの家に入る。この後足を洗い、オチツキモチを食べ、カタメノサカズキが行なわれる。このヨメリギョウレットのムラ内に於る経路を見ると、まず（1）ムラをただ通過するだけのギョウレットは図2の①、即ち秋山街道を通らねばならず、これ以外は通ってはならない。（2）ムラ内でも、TTからTSへのヨメは必ず①を通る。（3）TTからTMなら①②③④の順で、①⑤④、①②⑤④などは不可能である。（4）④を通過可能なのは、TMから出発又はTMに到着する場合に限られる。（5）TMからTAの場合も④⑤は認められず、④③②に限られる。この事からわかるのは、先述の設定原理の為に、使用の側面に於て、ホンドウリには序列化された区分がなされるという事である。①は最上位であり、総てのヨメリギョウレットに使用され得るが、②は②③④⑤関係のみ使用される。同様に③は③④のみ、④は④専用のホンドウリである。即ちTTからTSへのヨメが②以下は通れない様に、双方に連絡するホンドウリの内、低い方の区分以下のホンドウリは通らない事になる。又TMからTKの場合⑤①②を通れないように、上位区

分のホンドウリ沿線に向かう場合も、それ以上の区分のホンドウリは通らない訳である。これはムラ間の場合でも同様で、例えば見玉、源内山間の場合、津原、源内山間はホンドウリではないので、あくまで米原、堂平経由となる。津原から源内山でも、米原に戻って遠回りする事になる。越渡、津原間は、この区間から出発又は到着する場合のみ使用される。更にこの内部でも、豊郤、津原間は津原発着の場合専用である。

<チカムカエ>上述のヨメイリギョウレツを途中で待ちうけて、道端で冷酒、煮物、赤飯等をムラ人にも振る舞うのがチカムカエである。ダンス、長持、鏡台等はヨメ方のニソイが背負って出発するが、ここでムコ方のニソイに交代する。家によってはダンスを逆向きに背負い直したとも言う。ヨメイリギョウレツは必ずホンドウリを通る故、チカムカエも当然ホンドウリ上で行なわれる。チカムカエの地点は、本来「くれる衆ともらう衆の真中より少しもらう衆に近い所」が望ましいとされる。しかし現実には「寸法採って真中というのではなく、トナリムラかオラムラの内で行なわれる。又この地点は、ムコの家の中内に於る位置によって変わるし、時代と共に近くなったという。しかし老人達の指示により、地点は変わっても以下に述べる区分は変わっていない。ここではTT氏の所にヨメが来ると仮定した場合の事例を示す。チカムカエ地点は図2の④、即ち下穴藤に向かう橋の手前、⑤TT家の少しカミのW家前、シモでは③TT家から50m程の商店前、④同じく100m程のTS家前、⑤200m程のムラザカイ、⑥1km程の太田新田、の6ヶ所である。④まで出るのは下穴藤、⑤は

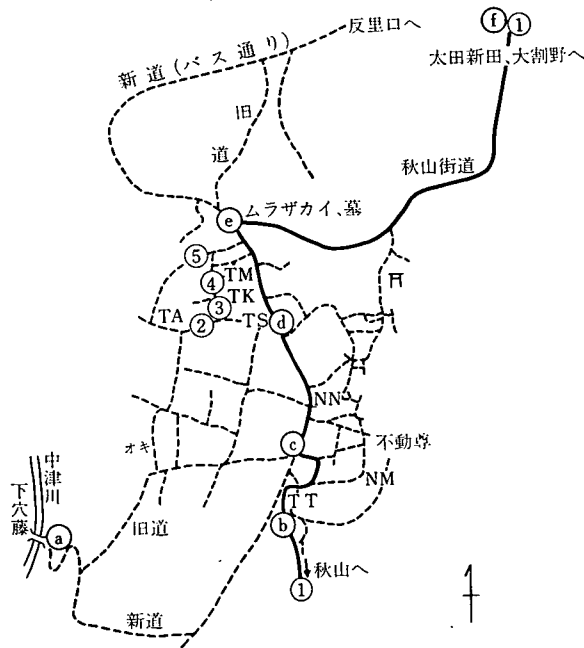


図2 見玉

秋山郷の総てのムラからの場合であり、秋山最奥部となると、大割野より遙かに遠いにもかかわらず、カミはこの2ヶ所だけである。他方㊦はトナリムラ太田新田及び、太田新田部落であるが700m程北の中山、そしてオラムラ内の場合、㊦は反里口、㊧は秋成から大割野まで及び石坂、そして現実にヨメの来る可能性のなかった長野市、十日町市やそれ以遠の総ての地域からの場合である。トナリムラ㊦までは、大割野以遠の日帰り圏、つまり飯山沿線の十日町、飯山の手前位まで、東西の段丘、沢のムラの場合である。

〈トリオイ〉ムラ内では、1月14日夜のトリオイもホンドウリを使用して行なわれる。現在ではユキムロ（カマクラ）を作り、もらって歩いたモチを焼いたり、トランプをしたりするだけである。しかしかつては大本家TS家に集まり飲食し、ムラのカミのハズレからシモのハズレまで秋山街道を拍子木をたたきながら追っていき、ムラザカイの外に追い出したのである。この時トナリムラ太田新田と喧嘩になる事もあり、まず子供、次いで青年、最後に大人同仕が竹竿等を持ち出して、半ば恒例の楽しみとして争ったものだという。

〈ムラザカイ〉ホンドウリは、ムラザカイの設定にも使用されている。無論ムラは2次元の空間の筈だが、ムラ人によれば、ムラザカイは決してムラを取り囲む線ではなく、ホンドウリ上の1地点である。それ故、地図上では下穴藤、清水河原、太田新田、反里口、さらには中里村とも接している筈だが、ムラ人にとってのムラザカイは、あくまで太田新田との間にしか存在しない事になる。

〈本分家の配置〉ホンドウリは、ムラ内で本分家の配置にも使用されているのであるが、その前に、ムラの社会構造の特徴をなすヤゴモリについて述べねばならない。かつてムラの政治、経済、宗教等あらゆる面で最も重要な単位となっていたのが、ヤゴモリと呼ばれる2つの本分家集団である。この内NヤゴモリのNN家がムラの草分けであり、その第1分家がNM家である。他方のTヤゴモリでは、TS家が大本家、第1分家はTK家である。他は入村者を除き、総てこの2大ヤゴモリに所属する。分家に出るには、結婚後10年から20年本家で働き、ようやく田畑と家をもらう。それ故本家は分家に対して発言権を持ち、大本家は大地主でもあって、ムラ中に威光を保っていた。分家間でも、古い分家と新しい分家では、序列が座順等に明確に示される。更にNヤゴモリとTヤゴモリでは、その古さの上でNの格が上とされている。ところでこの本分家の配置を見ると、より古いNN家はTS家よりカミに配置され、Tの最も古い3軒では、大本家、第1分家、奉公人分家（TA家）の順に並んでいる。第1分家の屋号はトナリ、奉公人分家はオオシモである。事実ムラでは、トナリと称する分家は、シモの隣りに出すべきであるとされ、カミに出すと本家がつぶれると言われていた。但し現実には空間的制約があり、Nでも第1分家は大本家よりカミにあり、それ以後の分家でもあまり守られていない。しかし現実はともかく、規範としては最近まで生きており、更に現実の配置にかかわらず、両ヤゴモリの大本家と第1分家を各々、カミウエシタ、シモウエシタと称している。

〈カミ、シモ〉ではこのカミ、シモと呼ばれる方位の設定には、ホンドウリがどんな使われ方をしているのだろうか。ムラ人によればカミとは南であり、シモとは北であるという。しかし以下の例によれば、必ずしもそうとは言えない。ムラでは、シンセキ間に限って互いの屋敷（家族）をカミノウ

チ（カミノシユウ）、シモノウチ（シモノシユウ）と呼ぶ習慣があり、又分家はシモに出すべきとされていた。そこでどんな場合にはカミ（又はシモ）に当たるかを、図3を用いて尋ねてみたのである。まず(a)の場合、矢印方向に分家を出せば北ではないがシモに分家を出した事になり、カミノウチ、シモノウチと呼びあう事が可能である。(b)先のTヤゴモリの例であり、枝道上の北東方向ではあるが相当する。(c)共に枝道にあり、東西にズレていても同じである。(d)しかし、完全に東西方向の枝道に並んだ場合はカミ、シモにはあたらない。更に(e)のように、秋山街道自体が東西に走っている所では、東西であるにもかかわらず、カミ、シモに当たるのである。以上からは、東西方向の距離は無視され、ムラムラを通したレベルでのホンドウリ、つまり秋山街道上の距離のみを有意として、カミ、シモが決定される事がわかる。ムラ同仕の場合にも、同じ方式でカミのムラ、シモのムラが決定されるが、東西方向の距離が無視されるのは、同じ中津川の谷の中だけであり、東西の段丘や沢のムラに対してカミ、シモとは言わない。いずれにしろ、ムラの内外ともカミ、シモは、中津川でも南北でもなく、秋山街道上の距離を座標軸として設定されているのである。

3.まとめ 以上の事例から指摘されるのは以下の諸点である。第1に、ホンドウリは数多くの空間的移動の中から、特定のものだけがその利用を強制される。第2に、レベルが設定されている事は、ホンドウリの設定原理との関連で理解される。ホンドウリは1本道の原理が守られていたが、枝分かれが不可避であった。しかしレベルの設定により、枝分かれの一方は、より遠くへ続く、レベルが上のホンドウリとされ、他方は、あくまでその沿線にあるムラを発着する場合のみの低いレベルのホンドウリとなる。つまり使用の側面からも、特定方向の選定と順序関係の維持をみさす2つの原理が明示されているのである。第3に、チカムカエの例では、地点がカミ2ヶ所、シモ4ヶ所に設定されたが、秋山街道を通過しては行きようのない下穴藤を除いて、いずれも秋山街道上に、つまり1本道の上に並べられている。ムラの四方の2次元の空間に並ぶムラムラが、1次元の、ホンドウリという特定の方向上の距離に読み換えられている訳である。又この地点選定に於ても、ホンドウリによるムラムラの順序関係が守られており、あくまでホンドウリ経由の距離に対応した地点が選定されている。第

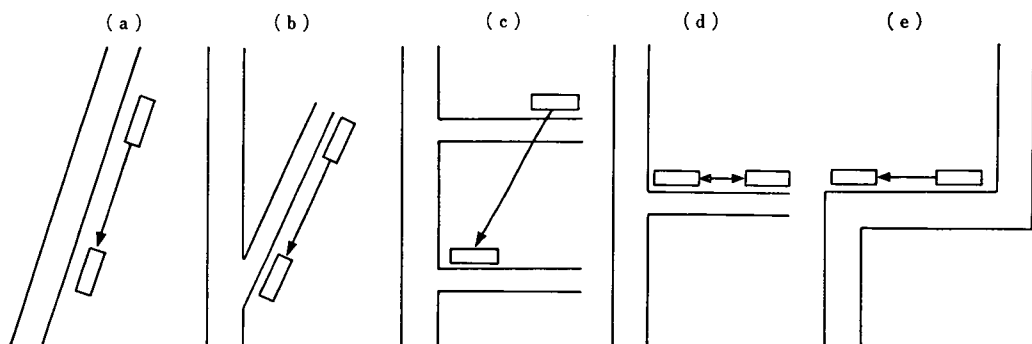


図3（上が南、太い方が秋山街道）

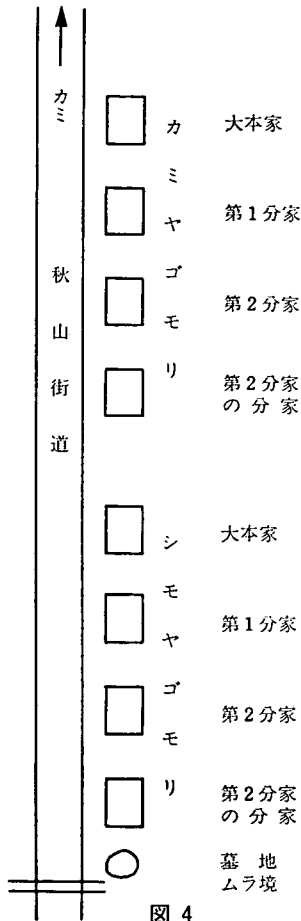


図 4

4に、カミ、シモはホンドウリという特定の方向に存在する距離にもとづいて設定されるが、この内シモにはムラから追放されるべき害鳥が追っていかれる。距離を隔てて追っていった先がムラザカイであり、墓地が設定される。更に、シモは分家を出すべき方位でもあり、先の原則に従ってモデル化してみると、図4の如くホンドウリという特定の方向に距離を隔てて、本家からシモに向かって順々に新しい分家が並ぶ事になる。これが2組カミ、シモに並んでムラになる、という形である。

Ⅲ. ホンドウリと我々意識

1. 我々意識の事例① ホンドウリは何の為に使われる道具なのかを明らかにしていく上で、筆者が注目したいのは我々意識との関連である。ホンドウリはトリオイ、死者、ヨメという特定の場合にその使用が強制されていた。これらはいずれも非日常的な空間移動を行なうものである。しかし、同じ非日常的空間移動でも、旅、伊勢参り、出稼ぎ、出征、縁談等では使用が強制されない。又御盆の場合、先祖を迎える時及び送って行った帰りは強制されないのに対し、送って行く時は必ずホンドウリを通らねばならない、という点にも注目しなければならない。これらはいずれも、人々にとってオラムラの外に追放されるべきものなのである。ヨメの場合も決して戻らぬ事を願い、足を洗って旅装で出発

した。こうした点からホンドウリは、我々意識と深い関連がある事が予想される。

そこでまず、同じ物質文化であり、目に見える形で人々の我々意識を示してくれる衣服の使われ方の事例を示す。まずTT氏夫妻について、素材となる衣服のハードウェアを示しておかねばならない。戦前では、男なら紺のモモヒキにブイト、女はモンペにブイト、多少経済力のある家でもヤモノコ（綿入れ）、夏は男はシャツ、女はアサジョウブを着ていた。作業中も、家事、就寝中も同じものであった。ヨソユキとしては、男女共ムラの外に出る時は、フダングでも、洗濯して垢の落ちたようなのを着た。というのは、今の様に服が無く、フダングか儀礼用のハレギかの区分しかなかったからである。1950年代についての調査は不可能であったが、現在の例では、TT氏は、①作業衣上下に帽子、地下足袋又は長靴という出立が多く、農作業の無い冬などは、②普通のズボン、シャツ、セーター等である。更にTT氏による分類に従うと、③少し程度の良いセーター、ズボン、④替上着、⑤スーツにネクタイ、皮靴等がある。奥さんの場合農作業時は、(1)モンペに木綿の着物、頭に手拭、作業の無い時は、(2)ズボンにブラウス又は着物に手拭、割烹着、(3)洗濯してアイロンをかけた割烹着、(4)ヨソユキのカーディガン、ズボン、上着、(5)冬ならストール、色物の長靴、(6)ワンピース、ハンドバ

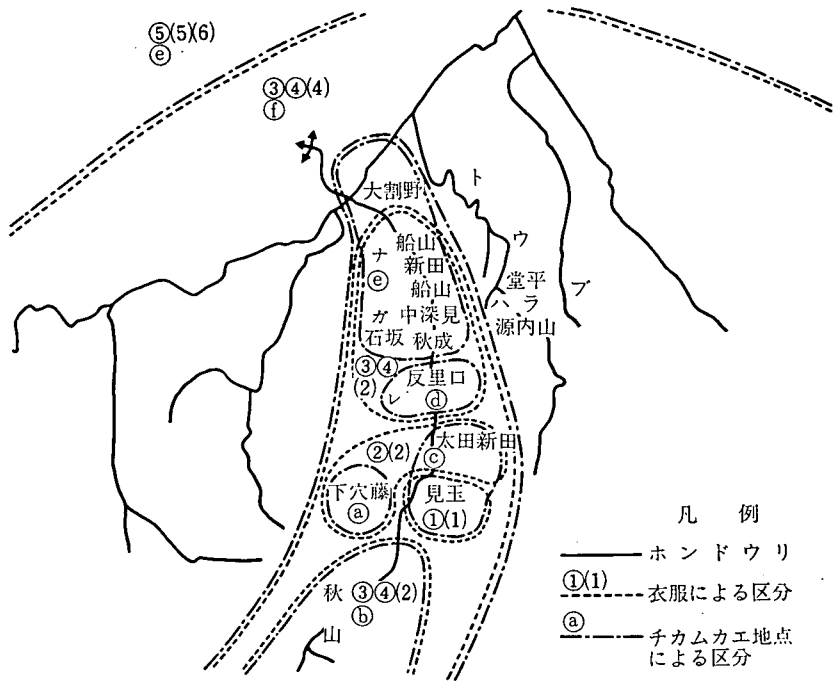


図5 ホンドウリと我々意識(戦後)

ッグに皮靴等がある。これらの使われ方として、まず「〇〇ムラに行くのに着換えて行きますか?」という問いに対する答えを示す。無論、非日常的でない、ちょっとした用事で知人の家を訪ねる場合と仮定しての質問である。これによると、「ヨソのムラに行く時は着換えて行くのが本当だの。ウチでは垢の付いたの着てて、そのまま行くのは悪い気がするの。」と言う。ムラ人の平均的見解としても、着換えないというのはムラ内、フダングでも洗濯したばかりのを着ていくというのが、トナリムラ太田新田と、下穴藤である。ムラ人は、着換えるか否かという衣服の分類に対して、ムラムラをオラムラか否か、という2分類で対応させるのである。これは昔も今も変わらないという。次に、現在の例ではあるが、ヨソのムラに行く場合の細分類を尋ねてみると、TT氏が②でも行くが①では行かず、奥さんも②で行くのが、トナリムラである。③④や、奥さんが「割烹着では失礼みたいな気がするの」ので、②から割烹着をとって行くのは、秋山や反里口、船山新田間の場合である。大割野、東西の段丘や沢、大割野以遠の日帰り圏の場合は、TT氏は③④で上例と同じだが、時によっては②のままで行くという事がない点が違っている。奥さんは④である。これ以遠となると⑤⑥(5)(6)という全くのヨソユキとなる。

通例衣服の選定は、TPOと言われる様に、時、行先、場合の分類、評価と、衣服のそれとの照合によって行なわれる。筆者の問いは、時、場合は固定し、行先に対する我々意識だけを基準として選定がなされる例を尋ねたものであった。もとより、それほど完全に我々意識だけが抽出される筈も無いが、一応の傾向としては、以下の様に要約できよう。まず着換えるか否かで、オラムラとトナリム

ラとの間がはっきり区分される。オラムラとそれ以外のムラは、最も基本的な分類である。しかし同時に、トナリムラは極めて我々意識上近いムラである事も、³「別に着換える事もないが」と言いつつ、やはり着換えて行く、といった態度に示される。これ以遠のムラは、1)秋山及び反里口、船山新田間、2)東西の段丘、沢を含む大割野以遠の日帰り圏のムラムラ、3)それ以遠、に分類されている。

2. 我々意識の事例② 次に、人々の生活上の様々な必要から、我々意識が拡大を要求される場合、どう拡大していくのかという事例を、空間的展開に留意しつつ検討していく事とする。まず、最も小規模な協力で済む場合は、直接の本分家間、即ちトナリとの協力が登場する。大規模な場合にはヤゴモリである。ヤゴモリは序列関係にありながらも、相互扶助の面で重要な単位であった。経済的援助、労働力の提供、縁組の相談から急病人の運搬まで、結局頼りになるのはヤゴモリであり、正月、儀礼、選挙と、事有る毎に結集する。こうしたヤゴモリが、ムラには2つある訳で、1ヤゴモリでは不可能な場合には、連合してムラという単位となる。選挙の事例なら、ムラから2人選出できる場合にはヤゴモリ対抗で、1人の場合には、両ヤゴモリが協力してあたるのである。これを空間的側面から見ると、現実的な配置でははっきり示せないが、図4に於いては次の様に言う事が出来る。即ち、カミからシモに向かってNヤゴモリが本分家順、次いでTヤゴモリが本分家順という空間的配置と、人々の我々意識の展開が一致しているのである。

個別ムラでは対処出来ない場合に連合が行なわれるのが、トナリムラである。見玉にとってトナリムラは、もともと太田新田だけであったが、橋改良以後は下穴藤を加えてサンガブラクと称し、祭り等の行事、火事等緊急時の助け合いなど³「切っても切れない仲」である。現在では学校の維持、選挙協力の面で更にこの重要性は増している。ここでは選挙の事例を示しておく、1955年の合併まで、見玉は秋成村であった。この時代には、見玉、太田新田各2人の村議を選出できた。しかし合併後は到底不可能となり、この時登場したのがサンガブラクであり、以後協力して見玉のTK氏を町会に送っている。他のムラも同様に、反里口は秋成と、船山は船山新田と、という具合に各々トナリムラとの共同戦線を張っている。又各ムラから選出できた時代に於ても、危ない時に協力を要請したのはトナリムラであった。こうした場合にみられる空間的展開の特徴は、必ずカミ、シモのトナリムラへと広がる事である。サンガブラクには西の対岸の下穴藤が含まれているが、これは前述の様に橋の改良、学区の統合以後の事である。石坂の場合には、見玉、下穴藤間より近く、永久橋もかかり、学区、行政区共一緒の秋成から、今もってトナリムラとみなされていない。同様に源内山も中深見のトナリムラとされていない。

トナリムラとの連合でも対処できない様な大火事、遭難等の場合に登場するのが、トナリムラレベルでの隣りとの連合、とでもいうべきナガレである。ナガレとは、船山新田から見玉あたりまでを言う。その名の如く³「中津川の同じナガレのムラムラ」であるが、源内山は勿論、同じ中津川対岸の石坂、下穴藤は含まれない。この場合にも、やはり人々の我々意識は秋山街道の方向に展開し、東西にはしないのである。事実ナガレにはトウブ（東部）、セイブ（西部）という呼び方があり、セイブというのはナガレの事であるが、トウブというのは、東の段丘上のムラムラを指す。この呼び方には見下

す意味が含まれているという。又トウブでも特に、源内山、堂平をハラと称し、ハラノシュウと呼んだが、これを源内山、堂平の人々は大変嫌がった。西の石坂、下穴藤、秋山、大割野以北のムラに対しても同様に、下に見る風が今日でも残っている。こうして見玉の人々の我々意識は、我家、ヤゴモリ、ムラ、サンガブラク、ナガレへと拡大する事、空間的に見ると、東西には展開せず、ホンドウリ順に隣りへ隣りへと順々に展開していく事が明らかになった。これは又、先の衣服の事例とも一致している。

3.まとめ 以上の事例で明らかになった事は、ホンドウリの設定のされ方が、実は人々の我々意識の展開と全く一致している、という事である。ムラ内では本家から分家へ、更にヤゴモリからムラへ、という様に、カミからシモの隣りへとという我々意識の展開がみられたが、このカミ、シモは、ホンドウリの方向の距離を座標として設定されていた。ムラレベルでは、トナリムラ太田新田が我々意識上特に近い重要なムラとされていたが、ホンドウリも反里口へ直行せず、まず太田新田に向けて設定された。更に我々意識はナガレへと展開するが、ここでもホンドウリの設定はこれと一致している。ナガレに含まれない源内山、かつての石坂、下穴藤はホンドウリも大割野経由であり、人々の我々意識上大変隔ったトウブ、東西の段丘、沢、も同様である。又ホンドウリの設定範囲という点でも、TT氏がスーツにネクタイ、奥さんがワンピースにハンドバッグで行く地域と、ホンドウリが設定されていない地域とが一致する。

Ⅳ. 結論 ホンドウリは何の為に使われるのか。

1.道路の確保とホンドウリ 以上の、ホンドウリがどう設定されるのか、何に使われるのかに関する事例から、ホンドウリは何の為に使われる道具なのかを検討していかなければならない。そこでまず、1本道の原理、ムラ順を守る原理を考えるなら、人々の生活において交通が大変重要であった事、他方道路の保守、とりわけミチフミが難事であった事を思い起こす必要がある。見玉の場合、太田新田経由、反里口直行の2ルートと共に保守するのは大変な負担であり、且つその必要もない。むしろ1本をホンドウリとして指定し、集中的に労力を投入していく方が、物理的距離を克服する道具としての道路の機能を達成するには合理的である。道路がウマミチ、サクバミチに分類され、この内交通上有用なウマミチがホンドウリとされている事は、これで説明がつく。又フユミチがほぼホンドウリのルートと一致していたが、これも各ムラが隣りのムラまで踏んでいったものを接続する方が道路確保上合理的であり、この説を裏付ける。つまり確保すべき指定道路として使用されているという解釈である。しかしこれだけでは、先にあげた、ホンドウリが特定の場合一つのみ使用を強制される等4項目の説明にはならない。又ホンドウリが、交通確保のさほど必要とは思われない秋山や東西の沢の奥まで設定され、他方大割野以東、以西の、むしろ必要性の高い筈の地域で、はっきり決められていない事も説明できない。更に、道路の確保という点で合理的であるといっても、場合によってはホンドウリの経路がかえって不合理な場合もある。例えば、かつて十二の木は大割野以上に栄え、道路確保の必要性も高かった。しかし船山新田、十二の木間のホンドウリは直行ではなく、大割野回りで、フユミチもつかなかったという。

2. ホンドウリの意味的機能　そこで次に注目せねばならないのが以下の3点である。即ちホンドウリは、設定原理、チカムカニ地点、ムラザカイの設定、トリオイ、本分家の配置等、設定、使用の両面に於いて、常に特定方向を選定しその方向へ物理的距離を隔てる事、且つ、これを維持する事が眼目とされている事。他方でこのホンドウリの設定、使用のされ方が、我々意識の展開と一致していた事である。

まず設定の原理では、共に境界を接し、一般の道路経由では順序関係のつけられない太田新田、反里口に対して、ホンドウリは第1の原理によって、あくまで太田新田経由で反里口へと向かう様に設定される。しかもこの順は、第2の原理によって必ず守られる。同様に、通常の経路では船山新田より近い筈の源内山は、あくまで大割野より遠い事になる。そして、このホンドウリにより強制されたムラムラの方向及び距離の大小が、人々の我々意識の展開と一致する訳である。人々にとって太田新田は、我々意識上最も近く、重要な関係を保つべきトナリムラであり、逆に源内山は、トナリムラに次いで重要な関係を保つべきナガレの船山新田より、我々意識上遠くかつ重要性も少ない。更にホンドウリの設定が、人々にとって全くのヨソである地域には及んでいないという事実もあった。このホンドウリの設定のされ方の特徴は、物理的距離を隔てる事が我々意識上の遠さを示し、小さくする事が近さを示す、というホルの述べた事例の様に⁸⁾、その方向と距離が、我々意識上の距離とその展開する方向を明示するのに使われる為である、と考える事が可能であり、事例もこれによって説明できそうである。

そこで次に使われ方を見ると、ホンドウリはカミ、シモという方位の座標軸として使用され、これにもとづいて本分家配置、トリオイ等特定の場合に、使用が強制された。まず本分家の例では、分家はシモに距離を隔てて出すべきであるとされる故、第1分家トナリは、ホンドウリ上に距離を隔てた隣りに、孫分家、奉公人分家、他ヤゴモリは、更に距離を隔てて順々に配置されるべきである、という事になる。この座標軸となるのがホンドウリであるが、ホンドウリは2本道にはならず、枝分かれても、レベルの設定により、一方が座標軸としてのホンドウリとなる。更に第2の原理と合わせて、この本家、分家、孫分家、他ヤゴモリという家々の1次元的順序関係は、必ず守られる事になる。ところがこの順は、人々の我々意識の展開する順でもあった。トナリはフユミチの確保を含めた様々な面で、最も重要な関係を保つべき我々意識上最も近い家であり、孫分家はあくまでそれより遠い。更に奉公人分家、他ヤゴモリの順に、重要性が薄れ、我々意識上の距離も増大する。こうして設定の事例同様本分家配置の事例でも、ホンドウリが使われ方の特徴は、その方向、距離が、我々意識上の距離を明示、固定するのに使われている為であると見るのが、最も妥当であると考えられる。

この他ホンドウリは、鳥、死者の追放にも使用が強制されたが、これらを距離を隔てて追放する事は、追放先との我々意識上の区分明確化を達成し、同時に対抗関係を保つ事によって、相互に重要なトナリムラとしての関係を維持していく事を可能にする筈である⁹⁾。ところがムラザカイは、ホンドウリ上の1点とされ、そのホンドウリは、設定の原理によって、トナリムラ太田新田にのみ向けて設定されている。更に第2の原理によれば、これが変更される事もない。我々意識上の区分明確化は、

曖昧になりがちな、我々意識上最も近いムラとの間で行なわれる 必要があり、且つそのトナリムラは、人々にとって重要なムラである事が明確にされなければならないはずである。我々意識の展開の事例によれば、これは太田新田であった。ところがホンドウリの設定と、使用の強制は、トナリムラ太田新田の方向にのみ距離を隔てて追放する事、即ち我々意識上の区分明確化、重要な関係を維持すべきムラである事の明確化が、太田新田との間でのみ行なわれる事を可能にし、保証する事になる。ホンドウリは、その方向、距離が、これら追放されるべきものと共同して、我々意識上の距離を更に明らかにし、固定していく為に使用されていると考える事が出来、設定、使用の諸事例は、実はこの為に必要とされると考えれば、説明がつく事になる。

次にヨメイリギョウレツの場合には、ムラ外に於いてもホンドウリの使用が強制された。それ故ヨメは、自家から次々と上のレベルのホンドウリへ出て、ホンドウリ方向の距離を踏みながら目的地に向かい、今度は逆に、次々レベルを下げてヨメ入り先の家に到着する事になる。要するに、ホンドウリの方向と距離を守る事が強制される訳である。他方で、これを迎えるチカムカエの地点選定も、通常の経路でなく、ホンドウリ経由の距離に基づいて行なわれていた。それ故太田新田からのヨメは、必ず反里口からの場合より短い距離を歩き、より近く、オラムラ内からのヨメと同じ地点でチカムカエ、即ちタンスの向き、ニソイの交代が我々意識上の所属変更を強調する行事が行なわれる。又、反里口を除くナガレの場合は、全て同じ地点で迎えられる。この場合も、設定原理によれば、ムラムラは必ず順序関係の中に位置付けられ、かつ第2の原理によりこれが守られる事になる。それ故、大田新田内の家より見玉に近い反里口の家があったとしても、必ず一担太田新田を経由しなければならず、あくまで太田新田からのヨメより長い距離を歩く事になる。更にこの距離の大小は固定される事になる。ところが、この距離、方向も又、衣服の例に示された我々意識の展開と一致していた。四方に連続的に距離の増大する空間内にあるムラムラが、非連続の6地点に読み換えられているのは、実は我々意識の展開の、物理的方向、距離への読み換えなのである。こうしてこの事例からも、ホンドウリは、その方向、距離が利用され、例えば太田新田が反里口より我々意識上あくまで近い重要なムラである事や、ナガレのムラムラが、我々意識上同じ遠さである事を明示する為に使われている、と考える事が可能となる。

要するにホンドウリは、単に物理的距離を解消する為の道具として使用されているのではなく、むしろ逆に遠回りの方向、距離を積極的に利用し、更に他の道具群、即ち追放されるべき鳥等に使用を強制する事によって、我々意識上の距離を明示、固定する為に使われていると考えられる。こう考えると、四通し、様々な空間的移動の道具として使用される道路の中から、特定の道路が原理にもとづいて設定され、特定の場合にのみその使用が様々の規制の下で強制される事もうまく説明できるのである。

フユミチの確保の例で示した様に、我々意識、特に隣りとの関係の確保は、道路の確保に不可欠であった。しかし他方、道路が確保されれば、我々意識上の距離にも変化が生じる事は下穴藤の例で明らかである。結局我々意識と道路は、タマゴとニワトリの関係にある事になるが、いずれにせよホン

ドウリ、つまり道路という道具は、見玉の人々にとって、直接的に交通を確保するという作業的機能性のみならず、更に意味的な機能をも与えられた道具として使用されていると考えるのである。

註

- 1) 大給近達「物質文化研究の方法論的考察」『日本民族学会研究大会抄録』1973
 〃 「物質文化」『ブリタニカ国際大百科事典』17巻 1975
- 2) 鈴木牧之『秋山紀行』東洋文庫 平凡社 1971
- 3) ホール、E.『かくれた次元』佐藤信行、日高敏隆訳 みすず書房 1973
 密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離に4分類された距離が、各々自分と他人の親密さの距離を明示する為に使用されている事が、多くの事例によって示されている。
- 4) 原田敏明「村の境」『社会と伝承』社会と伝承の会 1957
 近接するムラとの中のムラザカイの強調、即ち塔等ムラ境を明示するものの設置、死者の追放等が、我々意識上の区分の明確化、固定化に使用される事が示されている。

付記

調査は1973年から継続中であり、御協力を惜しまれない高橋俊輝、高橋貞友、池田乗順各氏をはじめ、見玉の方々には、心から御礼を申し上げます。